

葉集を読む

松岡 隆子

伝わってくる。下五の〈熊ン蜂〉が好い。「熊蜂」という音感に比べて和かな響きがあり、狛犬という霊獣に相對する優しさが感じられる。

浮雲も卯木の花もけふまぶし
醍醐喜美枝

ついてきし妹帰す花うばら
平沢千恵子

「卯の花のおう垣根に ほととぎす早やも来鳴きて：」
と、誰もが口ずさみたくなる夏は来ぬの朝だ。浮雲や卯木の花の清潔な白さは初夏の眩しさ。青空も風も、草木も人もみな眩しい。端的な表現で抒情的に初夏を詠い上げている。

夏つばめ監視カメラをよぎりたる
梶浦 道成

「○○ちゃん、ごめんね。お姉ちゃん今日のご用があつて一緒にいけないの。お母さんが心配するからもうお家に帰ってね。大丈夫？ 気を付けてね。」「うん、わかった」と、半べそをかきながらとほととぎす妹。遠く佇むエプロン姿の母の姿。甘い野ばらの風に吹かれていて、ふと甦った記憶の断片。省略の術を心得た上五中七の言い回しが鮮やかで、見事に郷愁の一齣を描き出した。

狛犬の口の中より熊ン蜂
宮田 悦子

黒くて大きな熊蜂は見るからに怖い感じがするが、実際は大人しく、自分の命や巣に危険がない限りほとんど刺すことはないという。花にぶら下がるように止まって蜜を吸っている姿はよく見かけるが、神社の狛犬の口の中から飛びだしてきたとは驚く。事実を述べただけだが、作者の一瞬の驚きが

町川を掠め、監視カメラをよぎり、街路樹の風を切つて自在に飛び回る夏燕の姿は、春に渡来したばかりの燕と違ってたくましく、壮大な夏のイメージだ。夏燕と監視カメラの取り合せは何ともユーモラスでユニークである。監視カメラをよぎる夏燕を見過ぎさなかつた梶浦さんの俳句眼は監視カメラを超えていると言えよう。

本少し重し卯の花くたしかな
菊池 京子

陰曆四月を卯月、卯の花月というが、そのころ降り続く長雨が卯の花腐しである。卯の花を腐らせるほどの長雨というものの、あの清楚な卯の花の白さが勝つてそれほど長雨の憂鬱を感じない。膝の本が少し重く感じられる程度だと菊池さ